イスラムとの協働を



塩尻　和子　東京国際大国際交流研究所長（イスラム思想）

しおじり・かずこ
1944年生まれ。東京大大学院で博士号取得。他の専門は比較宗教学、宗教間対話。元筑波大副学長（国際担当）。著書に「イスラームの人間観・世界観」など。

アルジェリア人質事件の犠牲者の無念を思うと、心から怒りがこみ上げてくるが、ここで冷静になって、テロを防ぐためには、どのような人々がテロリストになるのか、考えてみることが重要である。

テロリストとは何者か

カリフォルニア大学サンタバーバラ校のマーク・ユルゲンスマイヤーは、ある講演会で「この会場の誰もが特定の状況に追い込まれた時にはテロリストになり得るのであり、テロリストだからテロリズムを行うという説明はあまりにも怠慢な説明である」（「宗教研究」342号）と断言したが、この点こそが重要な鍵である。私たちは、テロの実行犯たちについて、特殊で特異な精神状態をもった、罪深く卑劣な殺人鬼だと考えているふしがある。しかし、世界史の過程を見渡せば、かつては反体制派のテロリストとして戦った人でも、そのテロ活動が成功すれば、建国の英雄として褒めたたえられるというパラドックスが非常に多いことも忘れてはならない。

ニューヨーク市立大学のタラル・アサドは「自らの所属する共同体への愛ゆえに殺人を犯す反乱者は、自分たちの国土を守るために戦うリベラルな社会の軍隊の鏡像である」（「自爆テロ」、青土社）として、国家の正規軍と反体制派の武装集団を対等にみる。テロリストも自分たちの行動が、政治的にも経済的にも混乱する社会を変革し、正義を全うするための正当な義務と信じているからである。

テロリストとは特定の状況に追い込まれた人々が、それぞれの地域社会の怒りや不満を代弁して命がけで戦う人びとであるとすれば、今回の事件においても、テロリストたちを「イスラム過激派」と呼ぶことはやめたい。過激な武装集団を「イスラム過激派」とか「イスラム原理主義集団」と呼ぶことは、テロリストの大義名分を認めることになる。世界にはそれぞれの宗教を背景にした危険な過激思想をもった団体があるが、誰も「……教過激派」とは呼ばない。宗教と暴力の結びつきは、世界のどの宗教にも見られる現象であるが、特にイスラムにはジハードという聖戦思想があり、ムスリムはテロに走りやすい、といった偏見や蔑視は根強い。だが、偏見や蔑視は、貧困や差別と同様にテロリストを生む要因になる。

寛容で柔軟だった歴史

私はキリスト教徒でありながら研究者としてイスラムを中心に一神教の思想史研究を行ってきたが、崇高な理想を掲げた愛の宗教といわれるキリスト教よりも、現実的な思想をもつイスラムのほうが、はるかに寛容な宗教政策を実施してきたことを学んだ。イスラムは1400年の歴史を通じて周辺諸地域の他民族と共存し、他宗教や他文化を柔軟に受け入れてきたが、残念ながら、その事実は現在の世界史の教科書で教えられることは少ない。我が国の中東・イスラム研究者の一部には、宗教的なジハード思想を取り上げて、イスラムを危険視する発言があるが、これも過激派を喜ばせるだけであろう。ジハードは本来、信仰上の修行を意味しているが、それを、戦闘を促す教えだと受け取り、テロを支援するムスリムは、現実には極めて少ない。

ムスリムの多くは、政治的不安定と経済的カオスの中で、暮らしやすい安定した社会を待ち望んでいる。テロを抑止していくためには、イスラムに対する理解と対話を促進し、世界で第2位の信徒数をもつムスリムと協働していくことが必要である。（寄稿）